



妻と女の間

上

瀬戸内晴美

毎日新聞社

妻と女の間（上）

昭和四十四年四月五日 第一刷
昭和四十四年四月二十五日 第六刷

定価 四六〇円

著者 瀬戸内晴美

発行者 星野慶栄

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区竹平町 一〇〇
大阪市北区堂島上 五三〇
北九州市小倉区紺屋町 八〇二
名古屋市中村区堀内町 四五〇

© 瀬戸内晴美 一九六九（検印省略）

妻と女の間（上）
目次

女人高野

散華

女の椅子

カメオの顔

夫婦箸

窓と窓

土曜日の夜

紅鶴

誓い

影法師

セ

六

四

六

六

三

三

三

四

六

朝の夢

青い靴

男友たち

秋風

恋の路

秘密

稲妻

かくれ家

明暗

二八

三九

三〇

二八

三〇二

三四

三四

三七

三九

装幀

枡折久美子

妻
と
女
の
間
(上)

女人高野

牡丹は三千株あると案内書にはあった。目のつづくかぎり、長谷寺の境内は牡丹にあふれていて、それらの花々がひとつのこらず今、たわなに開ききっている。

五月晴の空からふりそそぐ陽光は、三千株の牡丹の吐く息に染まり、虹色のかげろうをゆらめかせていた。花の海に浮かんでいる人々の顔も、満開の牡丹の色と匂いに酔ったように染まり、足もとまで漂っているような軽やかさに浮きたって見えた。

あまりの花々の群生の見事さに圧倒されたのか、見物の人々は妙に無口になり、ひっそりと動きまわっている。

「花の匂いのせいかしら、空気が重いみたい。牡丹の匂いって、何だかなまぐさくない？」

いつもは張りのある響く声をひそめるようにして、小池耀子は母の安澄をふりかえった。

ちょっとそりかえった小さな鼻をつきあげるようにくんくんと咽喉を鳴らしてみせる。

「ええ時にめぐりあわせましたなあ。今日がさかりのうちでもさかりでっしゃる」

「牡丹を見る日利にしては晴れすぎましたなあ。牡丹はうす曇りの下で見るのが一番よろしゅうおす」

「ぜいたくいわんとおきやす」

うす緑色の翳を持った純白の大輪の花々をつけた樹かげから、老夫婦らしい二人の閑かなつぶやきも聞こえていた。

どの花もみな、柔らかな花卉の重なりの中心に黄金色の花心を抱きつつんでいて、花心はどれも精気に満ち、炎の固まりのように燃えあがって見えた。

境内をぬけると、山上の本堂まで、ゆるい傾斜の石段の渡り廊下がはるばるとつづいていて、その石廊の両側も無数の牡丹に挟まれていた。

うす紅い、濃紅い、桃色、緋色、紫、藤紫、古代紫、葡萄酒色、象牙色、真珠色、中には黒ビロロのような黒牡丹まであって、上っているとも思われないゆるい石段を前後にびっしりつづいた人の列に押しあげられていくにつれ、瞼の中は花の炎に燃えおかされていく。

上っていく人の列と、降りてくる人の列が絶えることなく流れているので、動く二本のベルトがすれあうように見える。

白のニットのワンピースの下から、白い網靴下につつんだ膝の見えるしなやかな脚をのびし、ハンドバッグと靴を同じ皮の若草色でひきしめた耀子は、ともすると、紺結城の着物に自分で染めた草木染の紬の帯をあわせた母の歩みや、よどみがないくせに、いたって緩慢な人の動きをもどかしがり、とんとんと、列の横を足早にかけ上っては、立ちどまって母を待つ。

行く手から、いきなり御詠歌の声と鉦の音が聞こえてきて、人々の流れは、ちょっと活気づけられたように速くなった。石廊は曲がり角にさしかかっていた。

「……ええ、ひかりの最終には間にあいますね」

右肩の上から聞こえてきた男の会話の声に、安澄は思わず、目をあげた。降りてくる列の中に、やはり久我啓作の顔があった。安澄の肩と啓作の肩が、今にも触れあいそうにすれちがった。

手をのぼし、行灯型の電気スタンドを消すと、急に流れの水音が枕に高くひびいてきた。今まで、スタンドの笠の中に迷いこんで、び、び、びと翹音を小うるさくさせつづけていた蠅の動きがやんだ。

「もう時々、河鹿かじかの声が聞こえます」

と夕飯の給仕をしながらいった宿の女中の声を思いだし、安澄は枕から耳を離し聞きすましてみた。

室生寺と、この宿の間を流れる川音がいつそう際きわだったのと、隣の蒲団に寝ている耀子の寝息が、いかにも健やかに聞こえてきただけで、期待した声はなかった。

久しぶりで、よく歩いたせいか、脚がほてってだるく、神経は妙に高ぶっている。瞼を閉じると、目の中いっぱい今日の昼間見た長谷寺の牡丹の色がひしめきあふれてくる。

その中に、八年ぶりであった久我啓作の顔が浮かんできく。啓作はたぶん、気がつかなかっただろう。すれちがった瞬間、啓作がふりかえったような気もするが、安澄は、背後から来る人の列に押されるような気持で、あえてふりむかなかった。

声をかけたところで、立止まり、話しあえる二人の位置でもなかった。あんなところで、あんな

形でのめぐりあいなど、予想することも出来なかった。ほんのちらっと見上げただけだったが、啓作は見ちがえるように恰幅がついていた。

男の三十代の半ばから四十代の半ばという、逢わなかった歲月についた啓作の社会的な重みや、人間的成長が想像されると同時に、やはり三十代のはじめから四十代のはじめに移ってしまった自分の女の変わり方が思いやられるのだった。

もし、まともに目をあわせたら、啓作の目に、自分はどうか映っていただろうか。さぞ老けて見え、啓作の中に抱かれていた自分のイメージはこわされてしまっただろうか。

軽い声をあげ、耀子が夢を見ているらしく、寝がえりを打ち、腕と片脚を、どさっと安澄の方へ投げだしてきた。

闇に馴れてきた目に、耀子の白いむきだしの脚がほのかに映ってくる。子供のように無防備な寝相の悪さがいとしくなり、安澄は体をおこして、糊のききすぎた宿の浴衣の裾を整えてやり、蒲団をかけ直してやった。

この子の年には、もう私はこの子を妊みごもっていたのに――。お互いの部屋に別れて眠る習慣をつけてから、すでに長いので、娘の寝姿に蒲団を押えてやるなどというしぐさは全く久しぶりだった。母娘ふたりで、こんな、二、三泊の旅をするなどということも絶えてなかった。夫に逝かれて以来の八年の歲月のめまぐるしさが、今更のように安澄の胸に逆流した。

大学を中退して、新劇の養成所入りをしてしまったなどいえば、死んだ夫は何というだろうか。いえ、決してあの人が生きていたら、耀子にはそんなことは許す筈もなかっただろう。

ふいに、床の間のあたりで電話がけたましく鳴った。灯をつけ、あわてて受話器をとりあげると、太い帳場の男の声で、京都からだといい、つながれた。

「もしもし、お姉さま？」

聞こえてきた優子の声は、異様に上ずっていた。

「どうかして？ 何かあって？」

そう訊かずにいられない感じが優子の語調にあった。

「あたし……あたし……」

優子の声が絶句した。泣いているらしい気配が重苦しく伝わってくる。

「しっかりしなさい。どうしたのよ」

優子の子供の千香子か、治之に何かあったのだろうか。それとも、子供たちの父の政之が……

「あたし、もう死にたいっ」

「何をいうのよ。いったい、どうなったの、気を静めなさい」

「政之が、また……」

安澄は張りつめていた気がゆるんだ。子供たちの急病か、交通事故かと、とっさに廻っていた悪い想像が解かれただけでもほっとした。女ぐせの悪い優子の夫の例の過失が、また、何かの拍子に発見されたという程度らしい。

「ああ、それなら……」

「何がそれならよ。いっそ、交通事故で死んでくれた方がずっとましだわ。お姉さまなんかにかわ

らないのよ、この口惜しさが」

泣き乍ら、くっつかかるだろう優子の表情が見えるようで、安澄はため息をついた。

「いるの、政之さん」

「いるもんですか。あたしが知らないと思って……あんまりふみつけるにも程があるわ」
声の終わりは嗚咽になる。

「困ったわね。今からだと帰ってもあげられないし、今、何時？」

「……いいのよ。まだ九時だけど、いいわ。明日、あたし、そっちへいく」

「大丈夫？ もっと遅いかと思った。九時なら、十二時までには着くでしょう。帰りましょうか」

「ええ、でも、いいわ。せっかくだし、耀子ちゃんに悪いもの。はじめてでもないし、もういいわ
お姉さまにいいつけて、少しは胸が軽くなったわ」

まだ何も打ちあけているわけでもないのにと思ったが、安澄はだまっていた。何でもいいのだ。
こんな時、誰かに何か喋るだけで気が楽になるものらしい。少しは落着いてきた優子の声が伝わってくる。

「相手が厭なのよ。玄人ならまだしも、今度は会社の女なんですもの」

「困ったわね、政之さんも……」

当たり障りのないことしかいえない。安澄は優子や友だちのこんな場合の打ちあけ話を聞いた何度かの経験で、こういう際、決して、積極的な意見をのべてはならないということを識っていた。
相手が玄人だと、不潔さが一層まして厭だといい、素人だと、玄人の方がましだといい、年上だと

聞くと、あんな年上の女の手管にのせられたと口惜しがり、年下だというと、あんな馬鹿娘に侮辱されるのかといきりたつ。どっちにしても、夫に裏切られた妻の屈辱や怒りの爆発が、一日や二日でおさまるわけはないのだったし、どんな同情的な慰めのことばも、心の傷の表皮を上撫でして通りすぎるだけにすぎないのがわかつていた。

「明日、優子さんがここへ来るって」

目を覚まし、さつきから聞いていたらしい耀子にむかって安澄はいい、寢床に帰った。

「なあに？」

寢床から、瞳を大きく見開き、耀子は安澄の方へむいて寝返りをうった。わずかの間にも熟睡したらしく、皮膚も目もいきいきと輝いている。

「政之叔父さまが浮気見つかったの？」

黒目の大きな瞳が好奇心にそそのかされているようで、唇のめくれ上がったような微笑にも、面白そうな表情を感じ、安澄は苦笑いした。

「実も蓋もないいい方ね」

「ふ、ふ、でも、そうらしく聞こえたもの」

「そうなのよ」

「馬鹿ね、叔父さま。もっとスマートにやればいいのに。ドンファンぶっている癖に、ぶきっちゃね」

「耀子」

安澄は叱るつもりの方が甘くなってしまう。二十一歳の娘がきく口ですかと、たしなめたいのに、

あんまりはつきりした耀子のせりふは、からっとしすぎていて、叱る情緒もないのだった。

「ね、おかあさん」

耀子はまた大きく寝返りをうって天井に目をあげながら、ことばをつづけた。

「夫に浮気される妻って、やっぱり、どこか欠けたところがあるのかしら」

「そんなこと、一概にいけないようね。貞淑で美人で家庭的な奥さんを持っても、浮気する男は浮気しますよ」

「ふうん……そうかなあ……でも、だったら、世の中の奥様族って、何を支えにして、あんなに、でんと、安心しきった無神経な表情してるのよ」

「奥様族にだって、色々ありますよ。そう耀子みたいにきめつけられないでしょ」

「嘘！ あたし嫌いだわ。うんとすてきだった女でも、結婚して家庭に落ちついてしまうと、まるでお仕着せの上っぱり着せられたみたいに、個性も何もなくしちゃって、すっかりつまらなくなってしまう。それでいて、結婚してない女に、妙に優越感持って、あわれむようなさげすむような目つきしている」

「何を憤慨しているのよ。まだ耀子には、それほど切実でもないでしょうに。それに、そんないい方、やっぱり、未婚の女が奥様族を嫉妬してるみたいに聞こえるわよ」

「ちえっ、嫉くもんですか。あたしは結婚なんかしないんだから」

「あんまり大きな口きかない方がよくってよ。耀子くらいの頃は、女は一度は、そんなこといいたがるものよ」